

2023 年度 iTL 先端的プロジェクト奨学金 活動報告書

あしたよなあ  
～不時着した特攻隊員～

国際情報学部 国際情報学科 3年  
田畑美徳 (21G1109001D)

共同研究者  
征矢佳真 (21G1103005E)

## 目次

1. 研究要旨
2. 背景
3. 活動内容
4. 不時着した特攻隊員
5. 中央大学 OB 安永克己氏
6. 江名武彦少尉と戦後の黒島
7. 黒島特攻平和記念祭への参加と「あしたよなあ」
8. 第 47 回全国高等学校総合文化祭 取材
9. 株式会社鹿児島放送 訪問
10. 伊集院高校演劇部 取材
11. 知覧特攻平和会館 調査
12. 書籍『黒島を忘れない』
13. 日高康雄氏との会話
14. 所感
15. 今後の研究について

## 1. 研究要旨

太平洋戦争末期、鹿児島県など南九州地区の陸海軍基地から特攻隊員が出撃した。その通過地点であった鹿児島県三島村黒島には、10名の特攻隊員の遺体が流れ着き、6名の特攻隊員が救助された記録が残されている。黒島では、戦後も特攻隊員たちと島民の交流や慰霊祭が行われている。さらに、鹿児島県立伊集院高校演劇部によって舞台化されるなど、終戦から78年経った今でも物語は繋がっている。さらに、島民の一人である中央大学OBが不時着した隊員を知覧基地まで送り届けており、本学や私たちにも接点がある。本研究は、関係者に対し取材を行うことで、戦争末期に離島で巻き起こった物語を記録に残すことを目的としている。

## 2. 背景

本研究の動機は、中央大学OBが関係する知られざる物語である。太平洋戦争末期に行われた特別攻撃作戦、いわゆる「特攻」は多くの媒体で取り上げられ、その存在を知る人は多いであろう。しかし、特攻の際、不時着し生き残った人々や不時着後の行動はあまり知られていないのではないかと感じた。特攻から生き延びた者たちの記録や資料は極めて少ない。私たちは、十死零生と言われた特攻隊員が黒島という島に不時着し、生き延びたという事実に関心を持ち調査を行うことにした。調査を進める内に、中央大学OBが黒島で起こった出来事に深く関係していることを知る。不時着したものの再出撃を望む1名の特攻隊員を黒島から鹿児島本土まで、手漕ぎの舟で送り届けたのだ。我々は、不時着した特攻隊員に関心を持ちつつ、特に同じ大学で学んだ先輩が関わる黒島の物語に着目し、記録化することで物語普及の一助になりたいと考えた。また、戦後78年が経ち、戦争を知る世代は着実に少なくなっている。戦争の記憶が薄れつつある現在、我々の活動と記録が戦争への興味関心をもつきっかけとなり、記憶継承につながるのではないかという思いで取材を開始した。

## 3. 活動内容

### ① 事前調査

日付：2023年4月～5月中旬

概要：先行研究、証言資料を活用した事前調査

### ② 黒島特攻平和記念祭

日付：5月12日～14日

場所：鹿児島県三島村黒島

概要：毎年5月に行われる「黒島特攻平和祈念祭」への参加、取材

### ③ 第47回全国高等学校総合文化祭

日付：7月30日～8月2日

場所：鹿児島県鹿児島市

概要：第47回全国高等学校総合文化祭に参加した伊集院高等学校 演劇部への取材

④ 株式会社鹿児島放送

日付：8月24日

場所：鹿児島県鹿児島市

概要：株式会社鹿児島放送様との意見交換

⑤ 鹿児島県立伊集院高等学校

日付：8月25日

場所：鹿児島県日置市

概要：鹿児島県立伊集院高等学校 演劇部への取材

⑥ 知覧特攻平和会館

日付：8月26日

場所：鹿児島県南九州市知覧町

概要：知覧特攻平和会館での調査

⑦ 小林ちえみ氏

日付：12月17日

場所：東京都内

概要：書籍『黒島を忘れない』著者・小林 広司氏の奥様である小林ちえみ様への取材

#### 4.不時着した特攻隊員

##### 4-1. 概要

鹿児島市から南西に約100kmの位置に、黒島という島が存在する。この島は太平洋戦争末期に沖縄に向けて出撃した特攻隊員、10名の遺体が流れ着き、特攻機4機（6名）が不時着したという数奇な関係を持つ島だ。不時着した特攻隊員の内、特に黒島と強いつながりを持つ、3人の特攻隊員について、知覧特攻平和会館 八巻聡学芸員の聞き取り調査資料を参考にさせてもらい取材を開始した。



写真1 黒島 出典：鹿児島県三島村黒島 三島村役場公式 HP より  
<<http://mishimamura.com/>>

#### 4-2. 柴田信也少尉

1945年4月8日、一機の戦闘機がエンジントラブルにより、黒島に不時着した。陸軍一式戦闘機「隼」を操縦していたのは陸軍特攻第29振武隊所属、柴田信也少尉。柴田少尉は現在の鹿児島県南九州市知覧町に位置する知覧飛行場から出撃した。不時着した際、全身に大火傷を負った。不時着から3日が経過し、黒島の島民によって発見、救助された。その後10数名の若い女性で構成された乙女会が柴田少尉に献身的な介抱を施した。当時、黒島は本土との連絡船が途絶えており、情報や物資が届かず、完全に孤立していた。そのため島には火傷の薬はおろか、食糧もほとんど残されていなかった。そのような状況下で乙女会は柴田少尉に対して団扇で扇ぎ、傷口に湧く蛆虫を割り箸で取る作業を昼夜問わず、交代で行った。馬を潰して、採取した馬の油、キュウリの腐った汁を火傷の薬として傷口に塗布した。食糧に関しては、島の行事用として、蓄えていた米を柴田少尉や後に不時着する特攻隊員に全て提供した。一方で島民たちは山に生えた葛の根を掘り、その澱粉をお粥や団子にして、飢えをしのいだ。島民たちの献身性について、介抱した女性の一人、宮田サダ氏は以下のように語る。

宮田氏

「昔、兵隊さんと言ったら神様みたいに大事に大事にということでしたから皆、付きっ切りで、暑いから夜昼交代で団扇をずっと扇いでいました。」(八巻、2007)



写真2 柴田信也少尉 (出典：小林広司 (2015)『黒島を忘れない』、西日本出版社)

#### 4-3. 安部正也少尉

1945年4月28日、黒島に再び、一機の戦闘機が不時着した。陸軍二式複座戦闘機「屠龍」を操縦していたのは陸軍特攻第24振武隊所属、安部正也少尉。安部少尉も柴田少尉と同様、知覧飛行場から出撃した特攻隊員だった。安部少尉は無傷の状態です時着した。自分よりも先に不時着し、大火傷を負った柴田少尉がいることを知り、足を運ぶ。そこで柴田少尉の火傷の程度、島に薬が困窮している状況を知る。安部少尉は特攻隊員として再び沖縄に出撃するため、島民に対して舟で、本土まで送り届ける旨の交渉へと回り始める。安部少尉の交渉に居合わせた宮田氏は以下のように語る。

宮田

「父親たちは『とてもじゃないけど、舟で送り返すなんて不可能なことです。海の底に叩きつけられるぐらいしかありません』と説明しました。そしたら、安部さんは今まで座っていたのを片膝立ててね、短刀を畳に力強く立てて『お前ら、それでも日本国民か！？俺が戻ったら何千何百万の敵をやっつけるんだぞ？俺はまたここに戻ってきて、今度は爆弾を落としてやる！250kgの爆弾を落としてやる！！貴様らそれでも日本国民かー！！』と今度は怒鳴ったのね。』」(八巻、2007)

前述したように、黒島と本土との連絡船は途絶え、島には1隻の小さな手漕ぎの舟しか残されていなかった。その漕ぎ手が見つからない問題に直面する。加えて、黒島付近は潮の流れが速く、手漕ぎの舟では本土へたどり着くことは困難であると、島民たちは考えていた。そのため、安部少尉の嘆願を聞き入れることができなかった。



写真3 安部正也少尉（出典：同上書）

## 5. 中央大学 OB 安永克己

### 5-1. 中央大学 OB 安永克己

落胆する安部少尉に手を差し伸べたのが、島の青年の安永克己氏だった。驚いたことに安永氏は中央大学のOBである。安永氏は1943年10月に中央大学専門部商科を繰り上げ卒業した。同時期の学徒出陣により、文科系大学生を始めとした若い学生が軍隊へ駆り出された。不思議なことに安永氏は徴兵検査を受けたのにも関わらず、召集令状が届かなかったという。そして、1944年に家業の牧畜業を手伝うため、黒島に渡る。そこで島民の理解が得られず、再出撃ができないでいる安部少尉と出会う。同年代の安部少尉に対して、安永氏が舟の漕ぎ手を引き受けたのだ。当時の様子を安永氏は以下のように語る。

#### 安永氏

「結局、安部さんは説得に失敗して家の囲炉裏の所で、どうしても行きたいんだけど、行ってくれる人がいないとしょげ返っていました。私も囲炉裏に一緒にいたので、『それでしたら、私が行きます』と、行くことになったのです。」（八巻、2007）

2人は翌朝、島民には内密に出航する。舟を陸地から沖に出すため、後述する、日高康雄氏と4名の女性に手伝ってもらい、黒島から本土までの約100kmの舟旅に臨む。漕ぎ手を引き受けた安永氏だが、航海の知識は持ち合わせていなかった。しかし、天候と潮流に奇跡的に恵まれ、2日間の航海の末、鹿児島県の薩摩半島の最南端に位置する開聞岳の麓に到着した。安部少尉と安永氏は集落で一晩過ごし、特攻の最前基地だった知覧飛行場へ電話を入れる。翌朝、2人は迎いのトラックに乗り、知覧の司令部に向かった。黒島から本土を手漕ぎの舟で渡り切った2人を目の当たりにした司令官の様子を安永氏は以下のように語る。

#### 安永氏

「一緒に知覧の司令部に行きました。そしたら、司令官が『考えられぬ。特攻の特攻

だ〜！！』とすごく褒めてくれましたよ。」(八巻、2007)

知覧に到着後、安部少尉と安永氏は特攻隊員の宿舎である三角兵舎に宿泊する。翌日、安部少尉が安永氏に対して、日本酒の特級酒を振る舞ったのを最後に、安部少尉の行方がわからなくなる。安永氏は鹿児島市の家へと向かった。



写真4 安永克己氏(中)  
(出典：同上書)

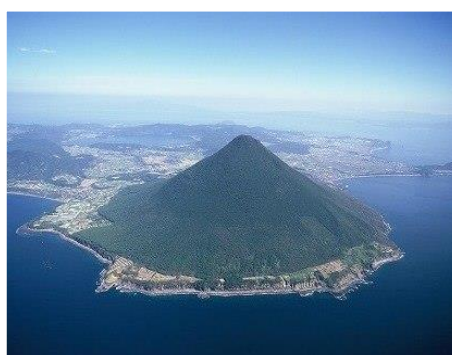


写真5 開聞岳(いぶすき観光ネット)  
<<https://www.ibusuki.or.jp/>>

## 5-2. 黒島と荷物

黒島では安永氏と安部少尉が出航したことにより、騒動が起きていた。潮の流れから朝鮮半島へ流されたことが予想され、2人の無事を諦めていたのだ。2人が出航してから、数日が経過し、1機の飛行機が黒島上空を飛行、旋回し始めた。そして、その飛行機は荷物を黒島に落とした。黒島の島民はその飛行機の操縦者は安部少尉であり、再出撃する際に黒島を訪れ、荷物を落としたと考えた。荷物の中には柴田少尉殿と書かれた、軍の処方薬・包帯・チョコレート・薬などが詰められていた。柴田少尉を始め、黒島の島民は、安部少尉が再出撃を果たし、黒島に荷物を投下したと信じている。しかし、荷物が落とされた正確な日付を覚えている人は存在しない。黒島から知覧まで手漕ぎの舟で安部少尉を送り届けた安永氏は戦後に自責の念に苛まれた。

### 安永氏

「今考えるとですね、私のとった行動というのはやっぱり褒められるべきものではなく、こういうことをするといかんと、」(八巻、2007)

一度死を決した安部少尉は黒島に不時着し、命拾いをした。それでもなお、特攻隊員として、再出撃を望んだ安部少尉の生き様は安永氏の日には以下のように映っている。



安永氏

「安部さんは戦争にはまり込んでいたというか、何としても俺がやらなくてはいかんと言うような一念で凝り固まっていたけど、それは、戦争を自分で始めたわけじゃなくて、戦争が始まったから解決の手段として特攻を選んでというあり方でした。安部さんは本当に戦争の犠牲者でしょうね。」(八巻、2007)

## 6. 江名武彦少尉と戦後の黒島

### 6-1. 江名武彦少尉

黒島に荷物が投下されてから数日が経過した、1945年5月11日に3人乗りの戦闘機が不時着した。戦闘機の名称は97式艦上攻撃機1型。乗組員は江名武彦少尉(偵察員)・橋本満二飛曹(操縦員)・前田長明飛曹(電信員)だ。鹿児島県の海軍航空隊串良基地から出撃し、エンジントラブルによって、黒島に不時着した。かつて特攻隊員だった江名少尉の貴重な証言記録が残されている。江名氏は出撃前の心境を以下のように語る。

江名氏

「自分の搭乗機に乗った時は、もう、戦う、言うなれば戦士ですか、そういう気持ちになります。やはりもう、覚悟のほどを決めるというのですか？面構えは鬼のような形相になるかもしれませんけども。実際に搭乗し、戦友も皆凛々しくしていて、周りの皆さんからの健闘を祈るような気持ちが伝わってくると、やはり戦う戦士になるもんです。」(八巻、2007)

江名少尉らは黒島から約1km離れた沖に不時着した。3人で懸命に泳ぎ続け、命からがら黒島にたどり着いた。一度死を覚悟した江名少尉は黒島に不時着し、何を感じたのか。江名氏は以下のように吐露する。

江名氏

「上がった時にはもう・・・、精も魂も尽き果てたということで、今までの自分は何だったのかということですよね。死に向かった人間が、そこで“ホッ”とするんです、陸に上がって。」

「島に上がった以上、生に対する執着がおきなかったということはなかったと思います。」(八巻、2007)

江名少尉らは火傷の回復が順調に進む柴田少尉のもとへ訪れた。柴田少尉と相談し、島の防衛に注力することを決断した。1945年6月12日に不時着した陸軍特攻第214振武隊の中村憲太郎少尉も同様に、防衛に務めた。不時着した特攻隊員の存在は、孤立していた

黒島島民にとって、大きな心の支えとなった。島民たちは自分たちの食糧を特攻隊員に優先的に提供した。このようにして、特攻隊員と島民の間に強い繋がりが生まれた。



写真6 江名武彦少尉（出典：同上書）

#### 6-2. 不時着した特攻隊員たちの戦後

黒島に不時着した5人の特攻隊員は、1945年7月30日に陸軍潜輸送艇〇ゆ十号で黒島を離れた。そして、終戦を迎える。戦後、柴田氏は献身的に介抱を施してくれた、黒島島民のやさしさが忘れられなかった。江名氏もまた、その一人である。2人は1977年5月に、黒島を再訪した。彼らは黒島の存在を以下のように語る。

##### 江名氏

「柴田さんの言葉を借りればね、第2の人生の出発点です。第2の人生は島の人たちのお陰で出来たわけですから故郷と言っていいかもしれません。柴田さんもそうですけど、それほど良くしてくれたんです。」（八巻、2007）

柴田氏は特攻で亡くなった仲間たちへの慰霊も兼ねて、黒島に当時の歴史を刻むモニュメントを造成する計画を江名氏に打ち明けた。しかし、計画が実現する前に、柴田氏は亡くなった。そして、戦後から59年が経過した、2004年5月11日に柴田氏の思いを受け継いだ、江名氏が黒島島民の協力を得て、特攻平和観音像を黒島に建立した。この日はかつて、江名氏が不時着した日である。特攻平和観音像が建立された翌年から、黒島特攻平和記念祭という慰霊祭が現在まで続いている。江名氏は2019年に亡くなるまで、慰霊祭に毎年足を運んだ。江名氏は特攻隊員、自分の立場について、以下のように振り返る。

##### 江名氏

「やっぱり、色々悩んでいても、そういう行動をとった、当時の特攻隊員は偉かったと思うんですね。最後に私が申しあげますけどね、特攻隊員というのは、やはり、基地

を飛び立って、帰って来なかった人が特攻隊員で、帰って来た者は特攻隊員ではないと。だから私も特攻隊員じゃありません、これはいつも、特攻体験をお話しする時に申し上げるんですけどね。やはり、生きて帰って来た者は特攻隊員と名乗る資格はないと思うんです。ひたむきに突っ込んでいった、亡くなった戦友が特攻隊員であると私は思います。だから、私たちは、亡くなった戦友の慰霊に終生務めます。」(八巻、2007)



写真7 江名氏(中央)柴田氏(右)  
黒島再訪の様子(出典:同上書)



写真8 特攻平和観音像(出典:同上書)

## 7. 黒島特攻平和記念祭と「あしたよなあ」

### 7-1. 黒島特攻平和記念祭への参加

私たちは2年ぶりに黒島特攻平和記念祭が開催されることを知り、主催者である三島村役場に急遽、参加することを申し出た。2023年5月13日、私たちは鹿児島市鹿児島島港へ向かい三島村役場担当者と合流。その後、主催である三島村村長や不時着した特攻隊員の親族や友人と交流を行なった。フェリー乗船の後、5時間の航海では黒島の物語を書き記した『黒島を忘れない』の著者である小林広司氏の未亡人、小林ちえみ氏から黒島や広司氏の思い、物語に関する広報活動について説明を受けた。



写真9 フェリーみしま (筆者撮影)



写真10 黒島(筆者撮影)

## 7-2. 船上慰霊祭

フェリーが黒島へと近づくと船上慰霊祭が始まった。船上慰霊祭は、黒島島民に救助された特攻隊員が、実際に不時着した箇所を船で回り、黙禱を甲板から捧げるというものであった。黙禱のため甲板へ向かうと、多くの特攻隊員ゆかりの方から声をかけられた。我々に声をかけていただいた方の一人は江名氏と交流のあった人物であり、彼に対する熱い思いや活動の詳細を語っていただいた。事前調査により、江名氏の活動は把握していたが実際に関係者から話を伺うことで故人であった江名氏の人柄や戦争、黒島への思いを肌身に感じる事ができた。戦後も黒島と交流を続けた江名氏は、その遺言により、死後不時着した黒島の海に散骨されている。



写真 11 船上慰霊祭の様子（筆者撮影）

## 7-3. 「悼 安部正也大尉」の碑

約 30 分間にわたる船上慰霊祭後、黒島大里港に接岸、我々は上陸した。黒島到着後、安部正也少尉の慰霊碑に案内される。この慰霊碑は安部少尉を黒島から本土まで、手漕ぎの舟で送り届けた、安永克己氏によって 2004 年 5 月 11 日に建立された。江名氏が特攻平和観音像を建立した、同日である。さらに、この慰霊碑は荷物が投下された地点にあたる。安永氏は、安部少尉に対する思いを碑文に刻んだ。



写真 12 安部少尉の慰霊碑（筆者撮影）

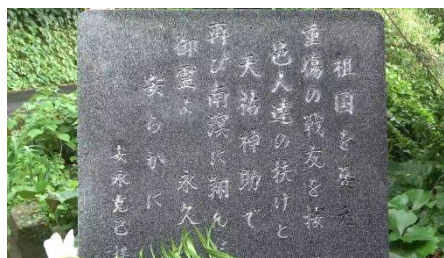


写真 13 安永克己氏の碑文（筆者撮影）

## 7-4. 慰霊祭第 1 部

その後は島の公民館「大里ふるさとセンター」にて、慰霊祭が開催された。本来は、江名氏によって建立された、特攻平和観音像の前で開催する予定だったが、悪天候により、

公民館での開催となった。黒島内外から、不時着した特攻隊員を知る関係者が一堂に会した。黒島からは、地元の小中学生も参加していた。老若男女問わず、黒島が一体となって、特攻で亡くなった人々を慰霊した。



写真 14 慰霊祭の様子（筆者撮影）

#### 7-5. 慰霊祭第2部

鹿児島本土から参加していた、鹿児島県立伊集院高等学校演劇部の生徒たちによる。黒島の物語を描いた演劇『See you tomorrow』の舞台発表が行われた。終戦直前、黒島という小さな島で起こった特攻隊員と島民の交流を描いた伊集院高校の生徒たちによる演劇は、1時間に及び、黒島島民や特攻隊員関係者に披露された。詳細に調査され、事実が描かれたこの脚本は観客の胸を打ち、涙する人もみられた。戦争によって、小さな島で生まれた物語を高校生が演劇にするという活動に関心を持った我々は、伊集院高等学校演劇部顧問上田美和教諭に感想を伝えた。我々は、風化しつつある戦争の記憶に対し一石を投じるような高校生の活動に、さらに興味を持ち、後日の取材を約束した。



写真 15 演劇『See you tomorrow』（筆者撮影）

#### 7-6. 慰霊祭終了後

慰霊祭終了後は「はなむけの宴」という、参加者同士の交流が行われ、特攻隊員を救助した方の御子息や地元学校の教諭たちから語り継いでいる当時の話や島での戦争教育、歴史等の貴重な話を伺った。亡き柴田氏の思いを受け継ぎ、慰霊祭という形に残した江名氏。その江名氏が亡くなった現在、演劇で黒島と特攻の歴史を語り繋ぐ、高校生たちに出会っ

た。慰霊祭を通して、戦時中から現在、そして未来へと、戦争の記憶が受け継がれていることを実感した。伊集院高校演劇部に触発され、自分たちも戦争の記憶を語り繋ぐ、一員になりたい。胸の鼓動が高鳴り、筆者はこの宴の場で、自分たちの活動内容及び、映像制作の決意を表明した。



写真 16 慰霊祭に参加して感じたことを語る筆者

#### 7-7. 「あしたよなあ」

慰霊祭翌日、江名氏により建立された特攻平和観音像を訪問。高校生たちとともに慰霊を行なった。観音像のある黒島平和公園は山頂付近にあり、島や各隊員の不時着場所を一望することができる。慰霊に訪れた我々は、高校生たちの祈りを見て、たしかな未来へのバトンを感じることができた。出航前、島民たちによって、「あしたよなあ」という文字が書かれた、横断幕が掲げられた。これは黒島の別れのあいさつで「明日会いましょう」という意味だ。伊集院高校演劇部の題目『See you tomorrow』はこの言葉から、生まれた。「あしたよなあ」という言葉を聞いた時、安部少尉の生き様が脳裏に浮かんだ。この言葉の意味とは裏腹に、安部少尉を始め、黒島上空を通った特攻隊員は今日はあるけれども明日はないことを悟った。そんな彼らに対しても、黒島島民はあしたよなあという言葉に口にしたのだろうか。不時着した特攻隊員たちが黒島を離れる時もこのような感じだったのだろうか。そのような不確かな情景を思い浮かべた。船に乗る高校生たちと黒島島民は「あしたよなあ」と叫び、別れを告げた。その姿を横目に、黒島を離れた。



写真 17 特攻平和観音像と高校生  
(筆者撮影)



写真 18 「あしたよなあ」横断幕  
(筆者撮影)

## 8. 第47回全国高等学校総合文化祭 取材

私たちは伊集院高校演劇部顧問、上田美和教諭と慰霊祭後も定期的に連絡を取り、演劇部の活動を伺っていた。幾度かのコンタクトの後、伊集院高校演劇部が行なった、黒島の物語を描いた演劇『See you tomorrow』が演劇の全国大会に招待されたとの報告を受け、現地へ取材に赴くことにした。全国大会（全国高校総合文化祭演劇部門）において模範演劇校として出場が決まった伊集院高校は、プロによる指導の元、舞台設計や演技の稽古を数日間にわたり行なっていた。我々は2日間の稽古と本番に同行した。『See you tomorrow』の舞台がこの大会で終わりを迎えるということもあり、高校生たちや関係者たちの熱気は並々ならぬものであった。我々は、稽古の合間に生徒および上田教諭にインタビューを行い、『See you tomorrow』への想いを語ってもらった。

インタビューに応じた生徒たちは皆、戦争に関する物語を演じることへの責任や演劇を通して黒島の物語を伝えることの重要性を語っていた。

また快く取材に応じてくださった上田教諭は、全国大会に模範校として出場したことへの喜びや演劇を通じての教育について語っていた。



写真19 セットを組み立てる様子  
(筆者撮影)



写真20 舞台裏側の様子  
(筆者撮影)

## 9. 株式会社鹿児島放送 訪問

8月24日から、私たちは3度目の鹿児島への取材を開始した。初日は黒島の物語の記録化にあたりプロの意見を伺うべく、現地テレビ局の株式会社鹿児島放送へ訪れた。ここでは、ジャーナリズムについてプロの意見を聞くとともに、同ゼミ所属学生によるドキュメンタリーへの講評や記録化の意見交換を行なった。プロのジャーナリスト達による忌憚ない意見により、私たちは研究に対する考え方やアプローチの仕方をより洗練化することができた。また交流を行うだけでなく、私たちの研究に注目していただき、翌日以降の取材に同行していただくと共に、私たちも取材を受けることになった。



写真 21 訪問の様子（筆者右）

#### 10. 伊集院高校演劇部 取材

2023年8月25日。私たちは鹿児島県日置市に位置する、鹿児島県立伊集院高等学校を訪れ、演劇部の取材を行った。戦争を知らない世代である、高校生たちがどのようにして不時着した特攻隊員と黒島島民の交流を題材にした演劇『See you tomorrow』に向き合っていたのか。活動前と比較して、活動後の自分自身の変化について、高校生たちの率直な思いを伺った。取材対象者は以下のとおりである。

- ① 演劇部顧問 上田美和教諭
- ② 部員 上江聖さん（柴田信也役）
- ③ 部員 菊永紅彩さん（宮田シナ役）
- ④ 部員 尾原直太郎さん（安部正也役）
- ⑤ 部員 宮原咲希さん（記者小林役）



写真 22 鹿児島県立伊集院高等学校（筆者撮影）

（Qは質問内容、「」内は各インタビュー어의回答）

- ① 演劇部顧問 上田美和教諭



#### Q 黒島の物語に出会ったきっかけ

「知覧の特攻基地とかそういったところにはよく見に行ったりしてたんですけど、ちょうど黒島の知り合いから、黒島の特攻の話を聞いて、そんな本があるから読んでみたらどうかと言われて本を読んでみたんですね。『黒島は忘れない』っていう本なんですけど。この本を書かれた、小林さんという方がもうその黒島のこの特攻兵の物語に非常に感銘を受けて、もう命まで削って作られたような本なので、それを読んで、その小林さんの本を通して、黒島の不時着した方々の物語を知りました。」

#### Q 黒島の物語を脚本にしようと思った理由

「特攻の物語は前からずっと作っていて、でもコロナで現代劇というのが非常に描きづらくなったんですね。ここ何年かもう舞台上でマスクをしていないと、不自然な時代になって、舞台で作品を作る時にどうにかこのマスクがいらぬ、そしてみんながマスクしない時代の時代物を作るのがよかろうとは、前から思ってたんですけど。それだけど、なんとなくコロナウイルスの蔓延で人々が見えないものと戦って、戦々恐々としたり。あとはもう強制的にマスクやそれから人との距離感みたいなのを強要するというのが、私にはすごくこう、全体主義っぽく感じましたね。だからそういった少し前の全体主義だった、大日本帝国のその大変な戦争の時代の人々の有様と似通ってはいないかと思って、この本読んだ時に「あ、これを使って作りたいな、今の自分の心境にも合うな」と思いました。」

#### Q なぜ題名を『See you tomorrow』と名付けたのか

「黒島の方言で「あしたよなあ」という言葉があります。これはまた会う日までとか、さよならって意味で、もう二度と会えない相手にも、必ずまた明日会いましょうねという願いを込めるんだそうです。あしたよなあってという方言を聞いた時に、これはその特攻で、二度と戻って来れない人たちが去っていく、さよならの言葉とまた会いたかったらというような、気持ちとぴったり合うなと思いました。あしたよなあって、つけたかったんですけど、ちょっとタイトルとして少し字足らずな感じがしたんですね。だから思い切って、英語のタイトルに変えました。敵国であるアメリカのこともちょっと意識したりしてつけてみました。」

#### Q 上田教諭の「あしたよなあ」という言葉の解釈

「あしたよなあ、という言葉は黒島の方々にとっては、別れであって、別れじゃないような、どこか縁がつながっていくような、後ろ髪を引かれるような言葉だと思いました。グッバイでもなくて、でも本当に暖かくて、いつでも迎え入れるよというような、含みを持っていて。だから島民たちの人となりみたいなのを表したような、すごく表してると思いましたね。だから特攻で、20歳そこそこで、亡くなっていく人たちは決して好き

で、このように自ら別れを告げたわけではなく、そこにはやはり、後ろ髪引かれるようなものがありますよね。見送って行った肉親や家族たち、仲間たちも みんなそんな気持ちで、本当に心から、さよならとは言えなかつただろうと思いましたね。だから、どこかまた会えるものなら会いたいみたいな、そんな気持ちがすごく現れてる、いい言葉だなと思います。私にとっての「あしたよなあ」は、「さよならであってさよならでない」ような「いつかまたどこかで巡り合う」ような、そんな感じが思っています。」

Q 高校生が演劇を通じて、戦争を伝えてくことの意義について

「映像を見たり、本を見たりするのはちょっと演劇は違いますね。その人に成り代わるわけですから。だからその人に成り代わって、その人の人生を迫体験することによる感情移入っていうのは、もう映像とか本を凌駕しても、おかしくないぐらいのものだろうと、私自身思っています。また、もっと言うと、それを見た観客の人たちも本や映像で教わるのとは全然違う感じを持つと思います。黒島の小学生や中学生が演劇を見た後に、感想文をくださったんですよ、それぞれの小中学校が。「今まで聞いていましたけど、本当に分かりました」みたいな「やっと分かりました」みたいな、そのような言葉を頂いて、あんな小さな子供たちだけに、本で読むとわかるけど頭の中で、でも目の前でうわーって、苦しんで、本当に悶絶してみせる、生身の人間の迫力っていうのは、もう胸に迫るものがあると思います。だから高校生が演じるっていうことは、彼らがこれから進んでいく道の中でものすごい大きなものがあると思いますね。過去に戦争で亡くなった人間を演じたことがあるっていうのは、戦争に対しての考え方も、自分の命に対する考え方も人に対する接し方や思いやりみたいなものも、やっぱりちょっと変わってくるだろうと思っています。」



写真 23 演劇部顧問、上田美和教諭（筆者撮影）

上田美和教諭の戦争と現代を重ねた脚本を受け取った、高校生たちはどのように思ったのだろうか。高校生から得られた、インタビューを抜粋した。

② 上江聖さん（柴田信也少尉役）

Q 特攻を演劇の題材とすると聞いた時の印象

「正直、無理だろうなみたい。一人の高校生が兵隊さんの役を演じるのは、なかなか結構難しいことだから自分にできるかなって思いながら、の始まりだった。知らないし、体験できることでもないし、そもそも普通の人なので、戦争に行った人の気持ちとか何一つ知らなかった。」

Q 特攻について、どのように学習を行ったのか

「知覧の特攻平和記念館に行って、実際の安部正也さんの資料とか見たりして。安部さんの顔や遺書を見て、どんな気持ちで、特攻に向かったのかとか。その当時の人々がどれだけ苦しい思いをして、暮らしていたのかとかを資料で見たり、語り部で聞いたりして、戦争のことについて知りました。」

Q 高校生を始めとした、若い世代が戦争を伝えていく意義について

「『See you tomorrow』に真面目に取り組めば、取り組むほどいい劇ができて、いい劇を見せれば見せるほど、お客さんは感動してくれて、感動すれば感動するほど、その劇のことが頭に残って、残ったことについて知りたいなって思ってくれることが大事だなと思います。一番は戦争って惨いことなんだよ、悲しいだけじゃなくて、その時の風潮とか全部ねじ曲げられるものというのが、わかることが大事だと伝えて、そんなことがあったんだということって感じるということが大事だと思います。」

Q 活動を通して、学んだことについて

「特攻兵の仲間の人や親族の方が、その黒島の時に観劇に来てくださって。自分たちが主に演じる人だけじゃなくて、その劇に少しでも出演している人と関係がある。思ったより、いろんな人が関わっていたみたい。自分たちが演じている、この中だけじゃなくて、劇を見に来てくれた人の中には、その安部さんと柴田さんってたくさん落ちてきた特攻兵の一人・二人なだけであって。他にも負傷した特攻兵の方々はたくさんいるし、島民の方々もたくさんいるし、そもそも戦争に関わっている人もたくさんいるし、色んな繋がりがいるなと絡まっているというか、関係しているっていうのはすごい発見でした。この人も戦争の当事者の親族なんだみたい。この人も戦争に関わっている人なんだっていう人がたくさんいて。それが発見だった。思ったより、色んな人が関わっているなって思います。」



写真 24 上江聖さん（柴田信也役）（筆者撮影）

### ③ 菊永紅彩さん（島民シナ役）

#### Q 知覧特攻平和会館での学習で感じたこと

「私たちが知覧特攻平和会館に行って、一番感動したというか、心打たれたのが『See you tomorrow』にも出てくる、安部少尉の最後の手紙というか、自分より下の子たちに送った手紙があるんですけど。その手紙の中にお兄ちゃん行ってくるからな、みたいな感じの言葉が書いてあって。ある程度、知識としては知っていたけど、やっぱり当時、特攻兵の方々が神様だとかそういう感じで、なんかそういうただすごい人たちって言われていたように、やっぱりそういう風に、私も思っていた部分もあるので。命をかけて戦っていた人たちだったっていうのも、分かったんですけど。それ以前に、ちゃんと人間なんだっていうのがすごく心に残って。やっぱりそういうところも劇の中で描けたらなっていうのは思いました」

#### Q 黒島での舞台発表について

「他の大会とかでも、知り合いとかから、結構すごく感動したって話は聞くんですけど。黒島では小学生、中学生も見てて、その上で感動したって言ってる子たちもいたし、その当時の話を知っている方やシナさん、サダさんを知ってる方々が感動したって言ったのは、本当にやったこっち側も感動したし、本当に黒島でできてよかったなど。この作品に出会えてよかったなっていうのは思いました。」

#### Q 活動を通して、学んだことについて

「先週の終戦日での特集とかで、戦争の方の話とかのニュースやドキュメンタリーを見て、やっぱりその自分たちで戦争の話をやったから、そしてちゃんと学んでやったから、そういうドキュメンタリーを見る目線っていうか、興味が変わったなって思っていて。今までただ流れているのを見てるだけとか、戦争嫌だぐらいにしか思ってなかったんですけど。重さっていうか、語る人たちの辛さだったりとか、話の重みとかを今までよりは理解

できて、その上で見れたのではないかって思います。知らないままでいるのはやっぱり良くないなって思いました。」



写真 25 菊永紅彩さん（島民シナ役）（筆者撮影）

④尾原直太郎さん（安部正也少尉役）

Q 特攻を演劇の題材とすると聞いた時の印象

「いろんな学校が演劇っていうのをやって、他の学校はコメディーだとか、恋愛ものだとかそういうのが多い中で、うちは戦争っていう大きなテーマということで、正直言うと自分たちにできるのかなっていうのが印象です

Q 活動を通して、学んだことについて

「今ウクライナとかロシアで戦争してると思うんですけど、そういう戦争に今まであまり関心がなかったんですけど、特攻っていう、戦争っていうテーマをした中で、そういう争いだとか、戦争だっていうのに今まで以上に興味を持つようになりました。」



写真 26 尾原直太郎さん（安部正也役）（筆者撮影）

⑤宮原咲希さん（記者小林役）

Q 宮原さんの『See you tomorrow』との出会いについて

「まず市大会で優勝したっていう話を聞いて。その高校選びに迷っていたので、とりあえず見学に行ってみようかなと思って、伊集院高校に見学に来て。初めて見たところは3階の部室でやった、その照明とかはなかったんですけど、それが今でも思い出せるぐらい、印象に残ってて。その劇を見ても感動して、ボロボロに泣いて。その伊集院に来て、私も演劇やろうと思って、伊集院高校に来て。4月に小林さんの役をもらって、その見てた舞台に立たせてもらったという感じです。」

Q 役に任せられた時の印象

「自分が見ていたものに関われるって、すごく嬉しくて。やっぱりあの感動を自分もつなげられるように頑張りたいなって思いました。色んな人に見て知ってもらいたいなって思います。」



写真 27 宮原咲希さん（記者小林役）（筆者撮影）

活動当初は、特攻の演劇に対して、抵抗感を感じていた高校生。しかし、演劇活動を進めるにつれて、特攻について主体的に学ぶ姿勢。得られた学びを演劇に投影したことは、高校生たちにとって戦争を知る、勇気ある一歩だったと感じる。また、演劇によって感動や興味関心を生み、それが伝播していくことが大事だと語るの高校生の思いは、机上の空論ではなく、新たな部員を呼び込む形で具現化されていた。今回のインタビューを通して、各高校生たちはどこか勇気に満ち溢れた、真っ直ぐな目で語っていた。上田美和教諭が考えるように、特攻の演劇活動を行い、戦争を知った高校生たちの心境の変化が推察される。

## 11. 知覧特攻平和会館 調査

### 11-1. 黒島と特攻が結びついた理由

8月26日、私たちは黒島での出来事より深い調査と専門家の見識を伺うため、鹿児島県南九州市知覧町に位置する、知覧特攻平和会館を訪れた。知覧特攻平和会館は、かつて沖縄戦に向け敢行された、特攻における陸軍の最大基地であった知覧飛行場の跡地にあり、その歴史を風化させないよう設立された。私たちは、なぜ黒島に特攻隊員が不時着したのか。黒島に不時着した後、再出撃したとされる安部正也少尉に関する資料等を調査した。当施設には、安部正也大尉の遺書や遺影が残されており、特攻に臨む彼の思いを知ることができた。さらに、残されていた資料から彼の複雑な家庭環境を知るに至った。それは叔父に宛てた、関係が良好ではなかった実母への想いを綴る手紙であり、彼の足跡を辿る上でこれらの資料は鍵となる可能性がある。安部正也少尉以外にも、彼と同部隊であった隊員たちの資料等から出撃日時等の貴重な情報を得ることができた。



写真 28 知覧特攻平和会館（筆者撮影）

私たちは黒島に不時着が多かった理由や安部大尉の再出撃に対する専門家の知見を伺うため、知覧特攻平和会館学芸員、八巻聡氏にインタビューを行なった。以下、八巻氏から得られたインタビューの回答を抜粋する。(Qは質問内容、「」内は八巻氏の回答)

#### Q 黒島に不時着が多かった理由

「黒島に不時着した特攻機の機数が多かった理由の一つとしては、やはり知覧から出撃した場合、黒島上空まで洋上飛行というのは、やはりどっかに何かしらの目標が必要ですので、知覧を出撃したら黒島上空を通過して、南の方に飛んでいきますので、特攻機も何かあったらこう引き返しなさいってことを言われています。そのため、エンジントラブルや天候不良等の何らかの理由があった場合、また来たルートで戻るんです。ですから行きで黒島上空を通った特攻機というのは、トラブルがあった際、やはり黒島は上空を通過しますので、鹿児島本土までたどり着けない場合はもうやむを得ずそういう、島の近くに南西諸島には種子島とか、徳之島や喜界島などの飛行場のある島もあるんですが、そういう風に、そこまで行ける機体はそこまで行って、いけない場合は、そのルート中にある島に

不時着したんです。」

Q 黒島には何機不時着しているのか

「黒島に不時着した機体はですね、把握してる分だけで4体ですね。4月8日に29 振武隊の機体。4月29日にあの24 振武隊の安部少尉。5月11日に江名さんの97 式艦上攻撃で6月の12日には214 振武隊の中村さんの機体、4機が不時着されています。」

Q 全員生きて不時着できたのか

「不時着された方で命を落とした方はいらっしゃらないですね。柴田さんとか怪我はしていますけど、皆さん洋上をまたその島の近くに不時着して生きてまた日本本土に戻ったりしていますね。」

Q 黒島には何名不時着されたのでしょうか。

「29 振武隊柴田さん、24 振武隊安倍さんで、江名さんの機体は97 式艦攻は3人乗りですので3名と214 部隊の中村さん1名ですので人数としては6名ですね。」



写真 29 八巻聡学芸員（筆者撮影）

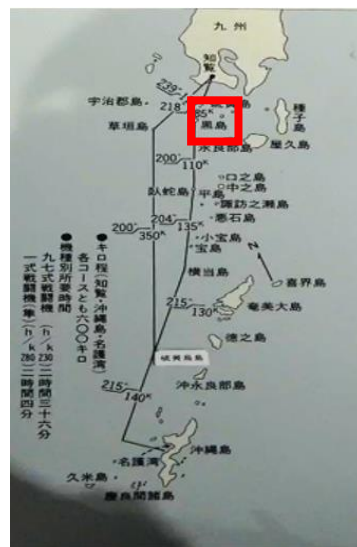


写真 30 特攻の飛行ルート（筆者撮影）

## 11-2. 安部少尉の再出撃の真偽

我々は、安部氏の本土帰還後の動向を探るため、安部少尉を本土まで送り届けた中大OB 安永氏から聞き取り調査した八巻氏に以下のような質問を行なった。



Q 不時着等で生還した特攻隊員はその後どうなるのか

「知覧飛行場とかですね、九州南部（から）、振武隊は沖縄に向かって出撃するんですが、特攻隊員の位置づけとしては、第6航空軍の司令部付きになってます。ですが知覧飛行場から出撃して、何らかのトラブルで知覧飛行場に戻ってきた、仮に飛行機がなくなっていたら、飛行機をもらうために、第6航空軍の司令部福岡にあったんですが、そこに行って申告をして場合によっては、飛行機をもらう。またはその特攻隊から、また違う部隊であったり、違う飛行戦隊の方に配属されるっていう事があります。よくあることです。他の隊員の方々というのも、例えば知覧まで戻れなくても、各南西諸島の島々に不時着された方々っていうのは、例えば喜界島とかに集結させられまして、第6航空軍としてもパイロットというのは貴重な戦力ですので、救援作戦っていうのを行っています。97爆撃機を発信させて、喜界島、そこに50、60名の特攻隊員集まっていたので、近くの島に不時着された特攻隊ですね、集めて救援機を出して回収っていうのもやっています。」

Q 安部少尉の本土帰還後の足跡は

「安永さんが伝馬船を漕いで、黒島の大理っていう集落から一晩かけて、伝馬船をこいで開聞岳の麓にたどり着いたみたいですね。その後、連絡をして知覧飛行場から軍用トラックで迎えに来て、知覧飛行場に行かれてで、司令部がありましたので、そこに安部さんと安永さんで申告をされているみたいです。その後安永さんは、知覧の町の中にある旅館の方に行ってそこで安部さんと別れて、その後安部さんがどうかっていうのは、安永さんの方はよくわからない。そこで別れてその後はよくわからなくなっています。」

軍事上の扱いを知ることで足跡を知る手がかりを得ることはできたが、安部少尉の確定的な動向を明らかにするには至らなかった。資料が残っておらず、再出撃の真偽は不明である。しかし、安部少尉は特攻戦死が認められ、1945年5月4日が戦死した日となっている。二階級特進となり、大尉となっている。これらの他にも多くの専門家的知見を伺うことができ、調査が大きく進むことになった。

## 12. 書籍『黒島を忘れない』

黒島に不時着した特攻隊員と島民の戦時中、そして戦後の交流について記された『黒島を忘れない』という書籍がある。伊集院高校演劇部顧問、上田先生が黒島と出会ったきっかけでもある。黒島に不時着した特攻隊員を語る上で、必要不可欠な存在だ。しかし、著者である小林広司氏は既に亡くなっている。私たちは5月に参加した黒島特攻平和記念祭の中で、奥様の小林ちえみ氏と既に知り合っていたため、この書籍が完成するまでに至った経緯を中心に、ちえみ氏に取材を行った。(Qは質問内容、「」内はちえみ氏の回答)

広司氏はテレビのドキュメンタリー番組のディレクターとして、黒島と出会った。

Q 広司氏は黒島と出会った時、何を感じたのか

「80代の方々がカメラを向けると、当時を思い出して、皆さんこう、堰を切ったように涙を流されたりね。今まで蓋をしていたことが、ご高齢になられて、いま語らないで、いつ語るんだというそういう思いに突き動かされるように、カメラにお話されてくださったって。その現実には衝撃を受けて、番組を一時間に収めるところか、ぐちゃぐちゃになってしまって、うちの夫は。ディレクターとしての仕事はほぼ、プロデューサーに助けてもらって、番組がなんとか完成して、オンエアされたと聞いております。」

Q 広司氏が本を書き始めた原動力をちえみ氏の目にどのように映ったのか

「日本人のルーツ、みんな戦争を経験してきているわけですね、先祖も。今自分が生きてこられているのも、あの戦争、その前の戦争を潜り抜けて、今の自分がいるんだということ。そういったルーツも考えるようになっていましたし、なにより、今語ってくださっているこの方々の思いをきちんと残したいという一心で、ペンをとったんです。」

広司氏は原稿を書き始めてから、2年6ヶ月後にステージ4の肺がんが見つかる。原稿の6割～7割を残して、広司氏は亡くなった。遺稿を託された、ちえみ氏は当時を以下のように振り返る。

ちえみ氏

「残された遺稿をもって、ちょっと私にはね、特攻の話はね、残った作品・番組は非常に感銘を受けたけれども、この文章を残されても、むげにはできないでしょ。命がけで書いてきたんだし。そうだ、あげちゃえばいいんだって。その黒島の人やら、皆さんにコピーして。まずは元特攻隊員の江名武彦さんが世田谷観音というところで、慰霊祭をやる時に来られているだろうから、慰霊祭が終わった時に原稿を差し上げようと思ひまして。」

「江名さんにお荷物になるようですけど、これが夫が残した遺稿ですからどうぞお納めくださいとってお渡ししたんですよ。そしたら、翌朝早朝に、江名さんから震える声で電話がありまして。江名さんから、「私は感銘を受けました。広司さんはよくお調べになって、よくここまで書いてくださいました。これはぜひ本に致しましょう」という風に江名さんがおっしゃられて。「これはやるしかありませんよ。ぜひこれを本にしましょう。後世に残しましょう」ということで。江名さんが震える声でね。声ってこんなに泣いてはいないんだろうけど、こんなに震えながら伝わるものなんだなっていう、その受話器からの波動が来てしまって。「はい そうしましょう」みたいな感じでお答えしたのがスタートだったのです。」

ちえみ氏は事実関係を調べるために、黒島に関係する3名に原稿を送った。安部少尉を手漕ぎの舟で本土まで送り届けた、安永克己氏（鹿児島在住）。安部少尉と安永氏の出航を手伝った、日高康雄氏（黒島在住）。不時着した特攻隊員、江名武彦氏（川崎市在住）ら3名だ。彼らによって、加筆修正が重ねられ、『黒島を忘れない』という書籍が完成した。江名武彦氏は2019年に96歳で亡くなった。ちえみ氏は江名氏から託されていたことがある。

ちえみ氏

「江名武彦さんの不時着した地点に、「自分が亡くなったらそこを少し骨を分けてもらってね。あの海に参ってきてくれるかしら」って頼まれていたので、その約束を果たしにあの小舟を出していただいて。島の人たち、村長、日高康雄さん、サダさんのお孫さんのみのるさん、元郵便局長の日高マナブさんとともに散骨をしてきました。だからそういう、あのなんでここまでやっちゃったんだらうっていうのもあるんですけども、やっぱりそれは縁ですかね。縁をこう大切に必死で繋ぎ止めたっていう感じもあるんですけども、それは与えられた宿命のようなものだったのかもしれないなと思っております。」

広司氏とちえみ氏は黒島の物語を発信した先駆者である。ちえみ氏は執筆を進める中で、数多くの黒島島民と交流してきた。書籍完成後も、黒島特攻平和記念祭に毎年足を運んでいる。普段においても、定期的にグループチャットで会話を行うそう。ちえみ氏と黒島に関係する人々の繋がりを感じた。黒島の存在、そこで生まれた出来事は人と人を繋ぎ止めるものではないだろうか。不時着した特攻隊員が恩恵を受けたように、広司氏とちえみ氏もまた、島民の温かさに触れたと感じる。黒島で脈々と受け継がれてきた、やさしさである確証を得た。



写真 31 小林ちえみ氏（筆者撮影）



今よみがえる、  
思い半ばで不時着した  
若き軍神たちと、  
鹿兒島沖に浮かぶ  
「黒島」の人々との、  
深い愛情の記録。

西日本出版社

写真 32 『黒島を忘れない』西日本出版社



写真 33 江名氏の散骨をする、小林ちえみ氏・日高康雄氏  
南日本新聞 HP より <[https://373news.com/\\_news/storyid/137109/](https://373news.com/_news/storyid/137109/)>

### 13. 日高康雄氏との会話

再出撃を遂行するため、黒島から出航した安部少尉と安永克己氏。その出航の手伝いを行った、日高康雄氏のご存命である。しかし、体調不良により療養中であるため、取材を行うことは困難だった。そこで、小林ちえみ氏の協力で、電話を通して、日高康雄氏との会話の機会を設けてもらった。(Q は質問内容、「」内は日高氏の回答)

#### Q 安部少尉と安永氏の出航を手伝った時について

「まさかあんな小さな船で内地に行くとは考えられなかった。その舟は何 10 人で舟を下ろして、引き上げたりして。それで内地からの食料とかそういうのを積んでくる、船との橋渡しをしていた、小さな舟でしたからね。その舟を下ろすのに、私もたまたま海岸へ行ったら、安永さんと安部さんの 2 人、それから女の人 4 人くらいいましたね、乙女会の人たちが。加勢してから、女の人たちは危ないから、私が手伝うからと言って。舟の下の方に

敷いてある木に水を汲んできて、それを水でぶっかけて、滑りを良くして、下ろすものだったのですね。私はまだ11歳でしたけど、父たちが魚釣りに行ったり、そういうのを見ていたので。3杯か4杯くらい、水をかけたんでしたかね。そしたら、安部さんがもう、とにかく急ぐんですよね。「坊や、早くしないと魚が逃げるぞ」と言って。「魚釣りに行くから、一緒に行こう」って言ったんですけど。見てみると、釣り竿とか持っていないんですね。これは久しぶりに、気分転換を図るのだと。自分と一緒に住んでいる柴田さんが全身火傷で生きるか、死ぬかのそういう状況だったので、気分転換のために海に出るんだなという、それくらいの軽い気持ちだったんですけどね。そして、2人を乗せて、安永さんはニコッと笑って、艀を漕ぎ始めて。鹿児島弁で「いたつきもんでな」と言いながら、漕いでいったんですよ。行ってきますからねという言葉なんだけど。安部さんは「ああ良かった」ということで、帆を柱にかけて、出ていったんですね。これで私もよかったなと思って。」

「そしたら、女の人たちが歌を歌い始めたんですね。ハンカチで目を押さえながら。おかしいなと、こんな兵隊さんを送る時の歌を歌うなんて。不思議にその時思ったんですけど。その人たちは知っていたみたいですね。内緒で出ていくから、村の人には知らせないでくれって。」

「私は夕方、舟を引き上げにいこうと加勢に行って、海岸に行ってみても、舟はないんですね。まだ来ていない、と思って。また陸の方に戻ったら、大人の連中が「あの舟はこのまま行くと朝鮮に流れていく」と言って、見ているんですよ。その時になって初めて、自分は村人が皆反対した舟を下ろして、加勢して手伝ったんだと。父が区長をしていましたので、怒られるのではないかと。本当に怖かったのを覚えていますね。」

Q 黒島に荷物が投下された時について

「それから4、5日してからでしたかね。また、安部さんと同じような方向から同じ角度で、黒島に飛行機が飛んでくるんですよ。「あら、また落ちてしまう」と思うと、そのままシューっと機を上の方に向けて、黒島の裏側の方に回って行ったのですね。その時、私は「安部さんが来た！」と絶叫したんですけど。安部さんは不時着したところを、もう一回確認するためだけに来たんだと。それで、柴田さんに薬品か何かを持ってくるからという約束をしたと聞いていたけど、やっぱりその通り持ってきたはずだなと思って。自分の家に入った途端、物凄い雷みたいな音がしたから、再び家出てみたら、柴田さんが宿泊してるところのところに段ボール箱を落として。そこで走って行ってみたら、安永克己さんの兄のテツヤさんが「柴田少尉殿か」と荷物を担いでいったんですね。「あ、やっぱり安部さんは生きていたもんだな」って。約束通りちゃんと薬を持ってきたんだなと思って。後で行ってみたら、柴田さんを初めて見たんですけど。火傷でとても見られない顔している

と聞いてたけど、まあまあ、これほど回復してればいいなという思ったものでした。柴田さんは嬉しそうにしていました。そしたら、テツヤさんが手紙を読み上げてくれるんですよ。読み終えてから、柴田さんが「軍医さんが書いたもんじゃ」と言っているんですよ。柴田さんの症状を内地に帰って、軍医さんに話をし、それに対する処方箋を出してくれたと。」

私たちには本研究を進めるにつれて、一つの疑問を抱いた。一度死を覚悟し、不時着した特攻隊員は当時を生きた人にどのように映っていたのかだ。日高氏に最後に聞いた。

Q 一度死を覚悟した特攻隊員たちと交流した日高氏の目には彼らがどう映ったのか

「歓迎会をしたんですけどもね、村人たちが集まって。その歓迎会の祝いの席で 18 歳の通信士の前田長明さんという方が、「私たちは命が惜しくて、ここに降りたわけじゃないんですよ」ということを言って、涙を流しながら。村の人に誤解されては、困るということで。そしたら江名さんが、さっと前田さんの後ろに立って。そして江名さんは「今、前田さんが言うように、命が惜しくて、ここに降りたんじゃない。エンジンが故障でどうにも飛べなかったから、本当は 800 キロ離れた所に爆弾を投下しなければならないのに 60 キロしか離れてないところで、爆弾を切り離したけれども。無事にこうして生きてきたんだ。決して、私たちは命が惜しくて来たものではありませんよ」という。前田さんという 18 歳の青年は、「聞いてください～村の衆～」という節をつけながら、泣きながら訴えていた。これが印象的です。」

18 歳の若さで特攻隊員となり、不時着後も死を望んだ前田長明通信員。不時着し、生き延びたことが悔しいとも捉えられるような前田通信員の言葉は、特攻隊員の儂い現実を如実に示していると感じた。日高氏は当時 11 歳の少年だったにも関わらず、鮮明な記憶を基に、淡々と話していた。忘れてはいけない大切な記憶として、私たちに託してくれる、そのような声だった。取材を直接行うことは叶わなかったが、戦争体験者と会話する、大変貴重な機会となった。



写真 34 黒島特攻平和記念祭に参加する、日高康雄氏（筆者撮影）



写真 35 小林ちえみさんの仲介で、電話で日高氏と会話する筆者

#### 14. 所感

本研究を通して、学んだことが2点ある。1点目は特攻隊員の儂い現実だ。十死零生と言われた特攻隊員。明日会いましょうという意味の黒島の別れのあいさつ「あしたよなあ」が特攻隊員には今日はあっても、明日はないとさらに辛辣に聞こえる。黒島に不時着した特攻隊員は、明日を生きるチャンスを得られた。しかし、島民の猛反対の中、島に唯一残された手漕ぎ舟を内密に持ち出してまで、再出撃を望んだ安部正也少尉。「自分たちは決して、命が惜しくて不時着した訳では無い」と強調した前田長明通信員。彼らが示すものは生き延びても尚、特攻で殉ずることが本望であったことだ。一方で江名武彦少尉は「死に向かった人間が、そこで“ホッ”とするんです、陸に上がって。」と語る。特攻隊員の実情は、自分の人生や思いを押し殺し、自分自身を錯覚させてまで、特攻に飛び立たなければならなかったのではないだろうか。特攻隊員の生き様から、私たちは確固たる意思を持ち、今という時間を大切にしていかなければならない。

2点目は戦争の記憶を若い世代が語り繋ぐ使命だ。戦後78年が経過した現在、戦争体験者は減少の一途を辿る。黒島では離島ということもあり、高齢化・過疎化が顕著に見られた。さらに先の未来では、戦争の記憶が風化することが懸念される。このような状況下で、黒島外から特攻の歴史を演劇で語り繋ぐ、伊集院高校演劇部と出会った。彼らのような取り組みこそ、今を生きる私たちが向き合うべき姿勢だと感じた。私たちは、中大OBに関係する歴史を掘り起こす、限定されたゴールを定め、本研究を開始した。しかし、伊集院高校演劇部と出会い、取材を進める中で、「自分たちが真剣に取り組めば取り組むほど、多くの人に触れられ、興味関心を生み出すことができる」や「黒島の物語の感動を自分も伝えられるように頑張りたい」という思いを語る高校生たちに感銘を受けた。彼らに触発され、黒島の物語を、映像を通して語り繋ぐ役目を担いたいと強く感じるようになった。

本研究を通して、戦争体験者の鮮明な記憶に触れ、次世代の取り組みに刺激を受けた。日常生活では味わうことができない、貴重な体験の連続だった。この体験を決して忘れない。

## 15. 今後の研究について

特攻や戦争を始めとした、埋もれている歴史を掘り起こすことに再び挑戦したいと考える。また、戦争の記憶を受け継ぐ、現行の取り組みや工夫を探求することに興味を持った。これらを次の研究の主題に据えて、私自身が発信者の一人となり、受け取った人が戦争の悲惨さや平和を今一度考える、そのようなきっかけを生み出す存在を目指したい。

## 参考資料

- ・小林広司『黒島を忘れない』西日本出版社, 2015
- ・城戸久枝『黒島の女たち 特攻隊を語り継ぐこと』文藝春秋, 2017
- ・福島昂『二度戦死した特攻兵 安部正也少尉』学芸みらい社, 2012
- ・高木俊朗『特攻基地 知覧』角川文庫, 1995
- ・八巻聡『聞き取り調査』知覧特攻平和会館所蔵

以下インタビュー（実施年）

安永克己（2006）、宮田サダ（2007）、日高康雄（2009）、江名武彦（2010）